

家族を支える税金

荒川区立第三中学校3年 近藤 美羽

私の家は母子家庭だ。母は、私が小学生の頃からずっと一人で私と二人の兄弟を育ててきてくれている。母子家庭になり、四人で暮らすようになってからは、環境の変化を感じることは多くあったが、日々の生活に不満を抱いたり不自由だと感じたりすることは一切なかった。それは中学校に入ってからと同じだった。

中学生になってからは、援助についての書類を目にすることが多くなり、自分の家が母子家庭だから税金からの援助を頂けているということを知っていたが、それがどういった内容なのかまでは知らなかった。なので、この作文を書くことをきっかけに、私たちが受けているひとり親を支援する制度について母に聞いてみることにした。

すると、同じ中学校に通う私と中学一年生の弟は、「就学援助制度」という手当によって給食費などの免除、都内の私立高校に通う高校二年生の兄は、「私立高等学校等奨学給付金事業」という制度で奨学金の給付を受けていることがわかった。私の家族は、就学に要する様々な費用を助成してくれる制度に助けられていて私の知らないところで、私たち家族の生活は支えられていたのだ。そのうえ、私が日々の生活に不満や不自由を感じなかったのは、「就学援助制度」によって最大限の支援をもらっていたからだった。

私はこのことを知ってから、税金を払っている全ての人たちや、制度を整えてくださっている方々のおかげで何不自由なく暮らすことができていることを感じ、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。また、それと同時に、もっと早く自分の生活を支えてくれている制度について知ろうとすべきだったと後悔した。

私が今、好きなことを思う存分やらせてもらっていることは、決して当たり前ではなく、母をはじめとする身近な人はもちろん、遠く離れた色々な人の支えによって成立しているものなのだというのを、税金の使われ方を考えることを通して知ることができた。

私は、自分や兄弟の学業や生活を支えてくれている人たちの思いに応えることができるよう、今後自分が税金を納める立場になったときには、私が納めた税金が困っている誰かの支えとなることを願って、少しずつ恩返しをしていきたいと思う。